

【解説】

新型インフルエンザの予防と治療における
オゾンマグネ療法の利用法

日下史章

日本医療・環境オゾン研究会会報, Vol.16, No.1, 10-11. (2009)

寄稿

新型インフルエンザの予防と治療における オゾンマグネ療法の利用法

日下診療所、オゾンマグネ療法研究所 日下 史章

新型インフルエンザはこの地球上に初めて出現するウイルスのため、それに対する免疫を持つものは皆無である。発生すれば世界同時大流行（パンデミック）を引き起こすことは確実である。新型インフルエンザウイルスによる感染者が発生する以前に有効なワクチンを準備することは不可能であり、また普通のインフルエンザに対するタミフルやリレンザ等のような特効薬は今のところ存在しない。

パンデミック発生後に有効なワクチンが急速開発され、それが世界各地に行き渡るには通常、12ヶ月以上の時間が必要とされており、パンデミック第一波の流行期間2ヶ月間（8週間）を従来の予防法と治療法だけを駆使していかに対処すべきかを考え、それに備えることはすべての医療関係者にとって極めて重要な課題である。

新型インフルエンザは普通のインフルエンザと比較して病態の重症度が大きく異なる。まず、潜伏期2～8日（平均4日）の新型インフルエンザは、感染者の年齢層が低く小児、若年者を中心に感染に対する抗原抗体反応が強く起こる。さらに、多臓器を侵害するため重症例が多く、致死率は70%以上と予測されている。感染患者の病態の特徴はウイルスが血液中に入って、瞬間に呼吸器以外の全身臓器を侵し始める。この深刻なウイルス血症に対し宿主は過剰に反応してサイトカインストームを引き起こし患者は早晩、多臓器不全の状態に陥り、死亡する。

インフルエンザウイルスの感染経路としては主として飛沫感染（くしゃみ、せきとともに吐き出されるウイルスを吸い込んで感染する）であり、他に経口感染（ウイルスで汚染された生鮮食品などを摂取することで感染する）や接触感染（ウイルスが付着した手で、口や眼の粘膜を触ることで感染する）などが考えられる。

流行時の外出にはインフルエンザウイルス予防用マスク及びゴーグル、防疫衣等の着用が必要であり、外出に使用したグッズはすべて処分して、室内には持ち込まない。帰宅時に基本的な予防法としてのうがい、手洗い、洗顔を行うことは効果的である。自宅、職場、集会所、医療施設などには可能な限り安全なクリーンルームを準備する。

ウイルスの飛沫・経口・接触感染をより効果的に予防するためには、オゾンが有する最も強力な作用である抗微生物作用（抗ウイルス、殺菌、抗真菌）では4mg/Lのオゾン水に30秒間浸すことでインフルエンザウイルスを不活化することが可能となる。このオゾン水でうがい、手洗いや洗顔することを推奨する。また、オゾン水は調理する生鮮食品の洗浄にも使用することができる。

空気中に浮遊するウイルスに対してはオゾンガスを利用した空気清浄装置を設置し、安全なクリーンルームを自宅、職場、集会所、医療施設などに設けることが必要である。

特に新型インフルエンザ患者を収容する病室は外部にウイルスが排出されないよう陰圧構造にする必要があり、当然、各病室にはオゾン空気清浄装置が設置されることになる。実際の新型インフルエンザ患者の治療法としてオゾンマグネ療法研究班ではウイルス感染の疑いがある場合は、発病前からオゾンによる大量自家血オゾン療法（MAH）と全身交流磁気治療を併施するオゾンマグネ療法を早期から開始することを考えている。

オゾン療法（MAH）に加えて全身交流磁気治療をさらに必要とする理由は、インフルエンザのパンデミックは太陽の黒点の活動と地球の地磁気の働きとの間に深い関連性があるという過去の事実からである。

インフルエンザのパンデミックと太陽の黒点活動の関係については1974年に英国のホープシン普森医学博士がインフルエンザの大流行と太陽の黒点活動の極期が重なっている事実を発見した。1918年4千万人の犠牲者を出したスペイン風邪の大流行も例外ではなかった。太陽の活発な黒点活動により生じた磁気嵐が地球に吹きつけ地球の磁気層を乱し、地磁気の働きが減少することにより人体の免疫細胞の作用が低下する。このことは低磁場環境の生体に及ぼす影響をマウスを用いて検討し、平均的な地磁気である平均0.5ガウスの1/10の低磁場環境でマウスを飼育したところ、リンパ球機能だけでなく、マクロファージや好中球を含めた総合的な免疫機能が低下することが明らかにされている。そのため、地上では免疫能力の低下した

人が一気に感染し、インフルエンザのパンデミックの勢いがさらに増すことになる。

環境磁場を低下させる原因として、地球磁場の人工的な遮蔽がある。例えば、人が鉄筋や鉄骨の建物の中で生活することにより、地球磁場の磁力線は鉄に吸収されて、室内の地場は60～70%に減少する。鉄で囲われている自動車や電車の内部も、また、磁気遮蔽状態になり、磁場は約50%に低下する。そのため、現代人は、慢性的な磁気欠乏状態にあり、磁気欠乏症状として、自律神経失調症、不定愁訴症候群として現れてくる。特に生体機能のなかでも、免疫機能の維持に大きな影響を与えることはよく知られている。磁気の不足によって免疫機能が低下すると、ひとは病気にかかりやすくなり、細菌や新型インフルエンザなどの大流行を引き起こす要因の一つとなることが考えられる。

地球環境の変化による磁気欠乏状態を効率良く補う目的でオゾンマグネ療法研究班では全身性交流磁気治療の利用を考えている。地球上のすべての生命体は太古より地球の周囲をとりまく磁気層とオゾン層の働きにより守られてきた。そのため磁気とオゾンが人体に与える生理学的作用には多くの共通点が認められる。その相乗効果に期待してこの2つの治療法を併施することにより各免疫細胞の働きを調節し、活性値を確実に高めることが可能であることを各種癌疾患の治療を通じて確認している。

もし新型インフルエンザがワクチン及び抗ウイルス剤の準備が無いまま流行した場合は弱毒性ウイルスの場合でも世界全体の死亡者は最大1億数千万人、強毒性ウイルスの場合では最大3億6千万人の犠牲者が予測されている。まさに人類は史上最大の危機に直面することになる。新型インフルエンザに対応できる最も強力な武器であるワクチンも抗ウイルス剤もないまま6ヶ月以上を生き抜くために我々が現在利用できるすべての予防法と治療法を総動員して治療にあたる必要に迫られている。

オゾンマグネ療法研究班では大自然の中にあつて生命体を存続させるために働く地球のエネルギー、オゾンと磁気的作用を利用したオゾンマグネ療法を駆使してこの非常事態に対応したいと考えている。

参考文献

- 1) 岡田晴恵 (2008) 新型インフルエンザの概要と現状 (講演資料), 荒川区医師会館.
- 2) ロジャー・コッグヒル著 (原田直子訳) (2007) マグネットヒーリング, pp.16-18.
- 3) 笠原多嘉子, 松石 純, 方 剣喬, 盧 頰, 岡田まゆみ, 瀬戸 明, 浅野和仁, 久光 正 (1997) 低磁場環境の生体に及ぼす影響: *in vivo* 細胞性免疫反応について, 磁気と生体研究会誌, Vol24, 7-8.
- 4) 中川恭一 (1995) 続・磁気と人間, pp.238-258, サン・エンタープライズ, 東京.
- 5) 江本明貴子, 帯金 静, 中室克彦 (2007) オゾン水の手洗いへの利用, 日本医療・環境オゾン研究会会報, Vol.14, No.2, 32-36.
- 6) 日下史章, 日下正章 (1995) 交流磁気治療の免疫細胞活性に与える影響について, 進行性頸部食道癌の1例-, 磁気と生体研究会誌, Vol22, 115-117.
- 7) 日下史章, 日下正章 (1996) 交流磁気治療の免疫細胞活性に与える影響について -インターフェロンを併用した多発性骨髄腫の一例-, 磁気と生体研究会誌, Vol23, 41-45.
- 8) 日下史章, 徳山博文 (2006) 前立腺癌におけるオゾン療法の試み, 日本医療・環境オゾン研究会, 第9回研究講演会, pp.35 - 40.

交流磁気治療、人体への生理的作用

- ① 血行促進作用
- ② 消炎鎮痛作用
- ③ 創傷治癒促進作用
- ④ 免疫細胞活性化作用
- ⑤ 内分泌促進・安定作用
- ⑥ 抗アレルギー作用
- ⑦ 酵素の反応速度を調整し
生命活動を維持する作用
- ⑧ 骨癒合作用
- ⑨ 自律神経調整作用
- ⑩ 逆転電子の正常化作用

オゾン治療による人体への生理的作用

- ① 血行促進作用
- ② 消炎鎮痛作用
- ③ 創傷治癒促進作用
- ④ 免疫細胞活性化作用
- ⑤ 内分泌促進・安定作用
- ⑥ 抗アレルギー作用
- ⑦ 酵素の反応速度を調整し
生命活動を維持する作用
- ⑧ 抗微生物作用
殺菌、抗真菌、抗ウイルス
- ⑨ 老化抑制作用